セーリス『日本渡航記』の
ローマ字書き日本語の表記

川　口　敦　子

1．セーリス『日本渡航記』

本稿は、イギリス人ジョン・セーリス（1579/80-1643）による『日本渡航記』に見える日本語語彙のローマ字表記を取りあげ、その特徴について述べるものである。

ジョン・セーリスはイギリス東インド会社の貿易船・クローブ号の指揮官であり、『日本渡航記』は、彼のイギリスと平戸の往復を記録したものである。記事は1611年４月18日から始まり、1613年６月11日に平戸に到着、イギリス帰国の1614年９月までの記録である。本文は英語で書かれており、日本に関する記事には日本語語彙が見られるが、同時代のキリシタン資料とは異なる表記で書かれた例が存在する。ただしその表記は、必ずしも英語の表記法に則ったものではなく、キリシタン資料で定着した表記を受け継いでいる部分も見受けられる。

本資料の日本語のローマ字表記を分析することで、17世紀初めのヨーロッパ人の間で日本語のローマ字表記がどのように受容されていたか､その一端を明らかにしたい。

2．日本語語彙の表記

本稿では『日本渡航記』の複製本として、東洋文庫監修・平野健一郎解説『重要文化財　ジョン・セーリス『日本渡航記』』（勉誠出版、2016年）を使用する（原文の引用には私訳を付す）。『日本渡航記』には数種類の異本が存在するが、その中でも東洋文庫所蔵の手稿本がセーリス自筆の原本と推定されている（複製本「解説」参照）。セーリスが訪日した当時の表記の実態を把握するためには、編集の過程で本文の綴り字が改変された可能性のある印刷本よりも、自筆原本を調査対象とするのが適切であろう。

また、語彙の判別のために、村川堅固訳・岩生成一校訂「セーリス日本渡航記」（新異国叢書『セーリス日本渡航記　ヴィルマン日本滞在記』、雄松堂出版、1970年所収）を参照した。

調査範囲は、日本に関する言及が見られる1613年６月８日の記事（複製本82頁）から、最後の1614年９月の記事（複製本137頁）までとする。柱や余白の注記も調査対象に含める。

次の表に、今回の調査範囲に見られる日本語語彙とその表記の用例を挙げる。

表　セーリス『日本渡航記』の日本語語彙と表記

語彙・用例数		表記		複製本の頁（括弧内は同一頁内の用例数）
天草	1	Amaxay		83
有馬	2	Arima		83(2)
按針	2	Ange		85(2)
板倉伊賀	1	Jcocora Juga		92
ウシアン殿（未詳）	1	Vshiandono		134
鵜瀬崎	1	Vszideke		83
浦賀	7	Oring gaw	3	101, 104(2)
		Oringaw	1	104
		Ormg gaw	2	104(2)
		Orungo	1	92
蝦夷	11	Yeadzo	1	104
		yeadzo	1	104
		Yedzo	5	128(3), 129(2)
		yedzo	3	128(2), 129
		yedzos	1	129
江戸	13	Edoo		85, 92, 100 (3), 101 (5), 105, 128, 135
大御所様	8	Ogosho: sama	1	94
		Ogosho sama	2	103, 135
		Ogoshosama	2	92, 135
		Ogosho-sama	2	94, 95
		Ososho-sama	1	94
大坂	15	Osaca	10	94(4), 95(5), 107
		Ozaca	4	93, 94, 107, 135
		Ozaka	1	135
刀	10	Cattan	2	90, 91
		Cattanes	3	95(2), 105
		Cattans	5	84, 89, 91, 95, 98
上野殿	4	Codske dona	3	98, 99, 101
		Codskedona	1	92

口之津	1	Cochinoch		83
関白殿	2	Quabacondono	1	135
		Quabicondono	1	137
五島	2	Goto		90(2)
後藤庄三郎	1	Goto Shozauero		92
コレ、コレ	1	Core, Core		107
コレ、コレ、ココレ、ワレ	1	Core, core, cocore ware		93
堺	3	Sacay	2	95(2)
		Sackay	1	135
薩摩	4	Mashma		83(3), 88
佐渡殿	4	Sadda dona	2	101(2)
		Saddadona	1	92
		Sadda-dona	1	101
志岐	1	Seque		83
下	3	Xima		83(3)
下関	2	Xemina-seque		94(2)
主馬殿	4	Semidone	2	130, 133
		Semydone	1	132
		Simmadone	1	86
将軍様	1	Shongosama		92
駿河	19	Sorongo	1	92
		Surunga	14	97(2), 98(4), 99, 101(3), 102, 104, 105(2)
		Surungo	4	98, 100, 101, 104
太閤様	6	Taico sama	2	106, 135
		Taicosama	1	137
		Tiqua : sama	2	94(2)
		Tiqua Sama	1	106
大仏	3	Dabis		100(2), 106
内裏	2	Dary		102, 104
太刀	1	Tatch		101
対馬	6	Tushma	5	134(2), 136(3)
		Tushmay	1	108
テンチェダイ(未詳)	6	Tencheday		100(6)

語彙・用例数		表記		複製本の頁 （括弧内は同一頁内の用例数）
唐人、唐人	1	Tosin, Tosin		107
殿様	1	Tone-sama		84
長崎	11	Langasacque	2	91(2)
		Langasaque	6	84, 89(2), 105, 131, 136
		Langesacque	1	91
		Nangasaque	2	83(2)
マンナダ（南無阿弥陀？）	1	Mannada		106
(松浦）信実	3	Nabesone	1	132
		Nabisone	1	130
		Nabusane	1	86
博多	4	Fucate	1	93
		Fuccate	3	93(3)
秀頼様	2	Fidaia sama		135(2)
兵庫殿	2	Fongo dona	1	92
		Fungo dono	1	99
屏風	1	Beobs		106
平戸	48	Firando		84 (5), 85 (3), 86, 87, 88, 89 (3), 90 (2), 91 (2), 92 (3), 93 (2), 104(2), 105, 107(5), 108(2), 110, 111, 113, 114 (3), 130, 132(3), 134(2), 135(3)
伏見	7	Fushami	1	107
		Fushima	1	135
		Fushimi	5	95(3), 96, 97
法印	12	Foyn	1	85
		Foyne	11	90 (2), 91 (2), 92, 93, 97, 107, 130, 133, 134
法印様	2	Foyne Sama	1	84
		Foyne sama	1	134
法印サマ・マサン	1	Fonye Sama masam		114
法印ホシン様	1	Foyne foshin sam		115

<table>
<tr><td rowspan="3">坊主</td><td rowspan="3">5</td><td>Bonzees</td><td>3</td><td>100, 106(2)</td></tr>
<tr><td>Bonzy</td><td>1</td><td>130</td></tr>
<tr><td>Bozes</td><td>1</td><td>130</td></tr>
<tr><td rowspan="5">仏</td><td rowspan="5">12</td><td>Fotoqui</td><td>7</td><td>100(2), 105, 106(4)</td></tr>
<tr><td>Fotiquis</td><td>1</td><td>98</td></tr>
<tr><td>Fotoquis</td><td>2</td><td>100, 106</td></tr>
<tr><td>Fottqui</td><td>1</td><td>100</td></tr>
<tr><td>Totoqui</td><td>1</td><td>106</td></tr>
<tr><td>松前</td><td>4</td><td colspan="2">Matchma</td><td>129(4)</td></tr>
<tr><td>松前殿</td><td>1</td><td colspan="2">Matchma donna</td><td>129</td></tr>
<tr><td>源家康</td><td>2</td><td colspan="2">Minna Monttono. yei. ye. yeas.</td><td>102, 104</td></tr>
<tr><td rowspan="2">都</td><td rowspan="2">10</td><td>Meaco</td><td>8</td><td>92, 105(2), 106(4), 107</td></tr>
<tr><td>Miaco</td><td>2</td><td>95, 105</td></tr>
<tr><td>脇差</td><td>1</td><td colspan="2">Waggadashe</td><td>101</td></tr>
</table>

日本語語彙の表記について、英語の表記法を主体としながらも、一部にイエズス会のポルトガル語式が混在している様子がうかがえる。

例えば、Waggadashe「脇差」のようにワ行子音の表記として w を使用するのは英語式である。ポルトガル式ならば u か v を用い、w は用いない。ところが x の表記については、英語式で［ks］を示す例（Amaxay「天草」）と、ポルトガル語式で［ʃ］を示す例（Xima「下」、Xemina-seque「下関」）とがある。Xima の表記については、「the island called Xima in the platts」（地図で Xima と呼ばれる島）と言及されていることから、地図に書かれた既存の表記を使用したものと考えられる。

カ行子音については、［k］に相当する表記として c, q, cq, k, ck が使用されており、現代のローマ字表記のように日本語語彙のカ行子音を k 表記に統一しているというわけではない。『日本渡航記』のカ行子音に相当する表記を分類すると、以下のようになる。

（1） c 表記

Cattan, Cattanes, Cattans「刀」、Osaca, Ozaca「大坂」、Sacay「堺」、Fucate, Fuccate「博多」、Jcocora Juga「板倉伊賀」、Cochinoch「口之津」、Core, core, cocore ware「コレ、コレ、ココレ、ワレ」、Taico sama, Taicosama「太閤様」、Meaco, Miaco「都」、Quabacondono, Quabicondono「関白殿」

（2）q 表記

Tiqua : sama, Tiqua Sama「太閤様」、Langasaque, Nangasaque「長崎」、Seque「志岐」、Xemina-seque「下関」、Fotoqui, Fotiquis, Fotoquis, Fottqui, Totoqui「仏」

（3）cq 表記　　　Langasacque, Langesacque「長崎」

（4）k 表記

Ozaka「大坂」、Vszideke「鵜瀬崎」、Codske dona, Codskedona「上野殿」

（5）ck 表記　　　Sackay「堺」

語彙の数からも、カ行子音の表記は c または q が主流であり、k は少数派であることがわかる。c と k の両方の表記を採る語彙も、例えば「大坂」15例中 ca 表記が14例（Osaca, Ozaca）、ka 表記1例（Ozaka）で、k の使用例は少ない。

また、「-dono」（～殿）とあるべきものを「-dona」と表記する例（Codske dona「上野殿」、Sadda dona「佐渡殿」、Fongo dona「兵庫殿」）や、「長崎」のナを Na ではなく La と表記する例等、随所に訛りと思われる表記が見られる。

セーリスが日本語をローマ字で表記する際に、「Xima」のように既存の文字表記に基づくと考えられる例もあるが、音声に基づく表記も少なくないと考えられる。セーリスは1613年1月20日の記事で「Foyne Sama masam」（法印サマ・マサン）という名前について、「They could not well pronounce his name, for Lanching said, it was Foyne foshin sam. But Lackmoye said as is about written.」（彼らは彼〔＝法印〕の名前をうまく発音できなくて、Lanching は Foyne foshin sam〔法印ホシン様〕だと言ったが、Lackmoye は前述の通りだと言った。）（複製本115頁）と述べている。ここで発音（pronounce）について言及していることから、セーリスの日本語表記には、実際の音声が反映されていると考えて良いであろう。

３．同時代のキリシタン資料との比較

当時のキリシタン資料のローマ字表記と比較して、セーリス『日本渡航記』の k 表記をどのように評価するべきだろうか。

『日本渡航記』とほぼ同時期に書かれたキリシタンの手稿類、例えばチンチョン神父による1613–1614年の殉教報告（AFIO 23-1。本文はスペイン語）や、1617年ポーロ報告書内の殉教証言書（ARSI Jap. Sin. 17, 317r-319r。本文は日本語）に見られる日本語のローマ字表記には、k の使用例は見られない（川口2006、2016）。

キリシタン資料に使用されているポルトガル語やスペイン語、イタリア語、ラテン語では k は外来語専用の綴字であり、日本語の表記にも用いられなかった。1620年にマカオで出版されたロドリゲス『日本小文典』では活用語尾のカ行子音に k の使

用が提唱されたが、同時代のキリシタン資料ではほとんど普及しなかった。

『日本渡航記』における k の使用は英語に基づくローマ字表記だからこそであり、英語を使用しなかったキリシタン資料の表記との違いはそこにあると言えるが、それでも k 表記が積極的に使用されていたわけではなく、キリシタン資料でも使われている c・q の表記が主流である。その他、一部にポルトガル語式の表記が混在していることからも、先行するイエズス会が考案したローマ字の表記規範が、イギリス人を含むヨーロッパ人に知られていたと推測される。英語使用者の表記はすべて英語式で統一されているとは限らないということである。

当時のヨーロッパ人の間で、日本語のローマ字表記がどのように継承され、またどのように変化していったのか。異なる複数の言語を背景とする資料のローマ字表記を比較することで、日本語のローマ字表記の歴史の新しい側面が見えてくるであろう。

〔付記〕本稿は JSPS 科研費 JP19K00643 による成果である。

【使用テキスト】

東洋文庫監修・平野健一郎解説『重要文化財　ジョン・セーリス『日本渡航記』』、勉誠出版、2016年。

村川堅固訳・岩生成一校訂「セーリス日本渡航記」、新異国叢書『セーリス日本渡航記　ヴィルマン日本滞在記』、雄松堂出版、1970年、pp. 1–411。

【文献一覧】

川口敦子（2006）「イエズス会ローマ文書館所蔵1617年ポーロ報告書内殉教証言書の日本語表記」、『長崎大学教育学部紀要　人文科学』72，pp. 1–11。

――――（2016）「フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵ディエゴ・デ・チンチョン報告書の日本文字とローマ字書き日本語」、『三重大学日本語学文学』27、pp. 1–11。

［かわぐち　あつこ　本学教員］